

創立六十周年記念対談

「改めて『これからの保育』を考える」
～質の向上と持続可能性の観点から～

令和二年十月十五日、県保連創立六十周年を記念して、汐見稔幸東京大学名誉教授と大豆生田啓友玉川大学教授による対談がwebにてライブ配信されました。

冒頭、土山雅之会長より「六十周年という節目の年ではありますが、新型コロナウイルス感染症予防の為、今まで経験したことのない保育を続けている皆様のご苦労は大変大きいと感謝しています。この対談が新しい保育の現場に活かす一助となり、静岡の子供の育つ環境がさらに前進する事を願っています。」と挨拶がありました。

その後の対談では、大豆生田先生の進行の下、始めに保育の質の向上について、汐見先生より世界的な背景から政府の検討会における議論の考え方や込められた想いを伺いました。続けて職員研修に話が及び、往還型研修や公開保育の意義、園内研修の事例、ドキュメンテーションによる保育の見える化の有用性について、多くの実例を挙げて紹介されました。

次に、自己評価ガイドライン改訂のポイントとして、振り返りのプロセスが大切であるとし、持続可能な社会と保育の役割として、私たちはどう貢献できるのか、保育者もSDG、Sに関心を持たなければいけないだろう。また、五歳児の義務教育化について、世界的な動向と、日本における議論の必要性につ

て言及されました。最後は保育を楽しむためのアドバイスをいただき、終始和やかな雰囲気の中で、対談は終了しました。保育の最前線におられるお二人の貴重なお話を伺えた、大変有意義な記念対談でありました。



施設長研修

(民間園長研修合同Web開催)
いま、求められる保育の専門性
～保育の質をめぐる研究の動向～

講師 神戸大学 准教授 北野幸子氏

期日 令和二年十一月十七日

間違いなく、歴史に残る年となった二〇二〇年。一〇〇年に一度のウィルスは世界中で猛威を振るい、生活様式そのものの変更を迫ってきました。保育の世界も例外なく変革が求められています。この「ピンチ」を「チャンス」に変えるために、今こそ求められる保育の専門性について、北野先生より講演いただきました。

休園の措置や、医療従事者・エッセンシャルワーカーのみを対象とした特別保育実施の影響で、著しく減少した子どもの運動量。マスクの着用が必須となり、口元が見えない中で保育を迫られた場合の〇・一歳児の発達への影響。行事やイベントの中止・縮小による表現の機会減少…。不安要素や調査研究から見えてくるネガティブな結果をしっかりと受け入れたうえで、子どもにとって保障される

べき経験が保障されているか。変わり続ける社会や地域、保護者からの要望と、子ども達の主体性をバランスよく繋ぐことはできているか。改めて、自らの保育を見つめなおすことの必要性を感じると同時に、乳幼児期の子ども達に関わる『保育』という仕事の責任を感じました。

また、子どもにとって大切な経験を保障するための具体的考え方として、乳幼児教育は「コンテンツベース」ではなく、学ぶ内容よりも、興味を持ち、関わり、考え、工夫し、諦めずに取り組み、そして楽しむというプロセスを重要視しなければならぬというお話をいただきました。保育者は、遊びの発展や思考を支え、子どもが自ら考え、選択できる環境を用意し、そして意図性・願いをもって子どもを見守る。一人ひとりの発達に寄り添い導くために、スタンダードな歳児別の発達を(スケールとして)知ったうえで、できる・できないで判断することも、無理に「当てはめる」こともせず、この時期に適した関わりを模索する。さらに、このような状況下だからこそ、例年以上に丁寧な、よりなだらかな小学校との接続が望まれる。

今だからこそ確認、再考できたことが多くあり、未だ終息が見えないコロナ禍においての指針に溢れた、実り多い研修会でした。北野先生、ありがとうございました。

